

木の言い分 ④

■したたかな植物たち

物言わぬ植物たちですが、生き方はしたたかです。今回は事例をあげてお話ししましょう。

写真1は海岸埋立地において、芯土50cmを耕起したところへ1mのマサ土を客土し、その表層土30cmにピートモスと鶏糞を混合攪拌し、その上に植樹したところです。

写真2は15年後の状態です。本数は5分の1に減っていますが、青々とした樹冠を形成しています。生長の早い落葉樹が常緑樹より先行し、生長の遅いものを被圧し枯損木になって自然淘汰されています。最も大きいものはムクノキで植栽時120cmが12m10cmまで生長し樹冠面積は当初の0.7㎡から37㎡にも広がっています（51倍）。かといって常緑樹がすべて淘汰されたわけではなく、あるクスノキは植栽時61cmだったものが10m80cmになり、樹冠も0.24㎡から5.7㎡になっています。土壌改良をよくすれば、環境が悪くとも樹木はそれなりのバランスで自分たちにとってより良い状態に生長していくという例です。

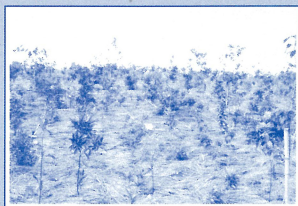


写真1 植栽時

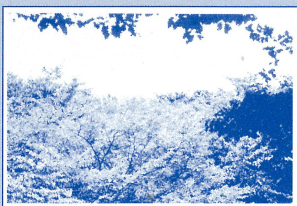


写真2 植栽15年後

自然の状態の場合では泉南の里山、コナラ林での例をあげてみましょう。平成15年に確認された実生苗は403本（/150㎡）を数えました。平成12年の2本、13年26本、14年224本と比べると14年秋がコナラの大豊作年であったことがわかります。ただ、ここでも自然淘汰があり、15年の春の403本が同年秋には106本まで減っていました。翌16年秋の観察では3本になっています（残存率0.7%）。非常に厳しいとはいえ、それでも50㎡に1本の計算になります。豊作年以外の残存率は限りなくゼロに近づきます。

樹木同士で空間、光を奪い合い勝ち残れなければ枯れていくだけの容赦ない世界ですが、それぞれしたたかに戦略を巡らせて生長しようとしています。もし彼らに声があっても枯れてゆく木は恨み言など言わないでしょう。彼らにとって個体の死は死でなく、種としての存続は次世代に受け継がれてゆくからです。

個体の存続のみにこだわり、騒ぎ立てるのはヒトだけ。10年や20年の短いスパンでの造園設計では植物にばかりにされてしまいますね。